

蕨学園「落語を楽しむ」

第 25 回 鑑 賞 会

2018. 6. 13

昭和の名人 5 代目古今亭志ん朝に逢う 其の弐



1. 会 場 蕨市民会館会議室 401 室
開場 13:30、開演 13:45
2. 内 容 古今亭志ん朝「火炎太鼓」28 分
1973(S. 48). 10. 31 国立演芸場で収録、35 才
三遊亭兼好「木乃伊取り」38 分
2011. 11. 29 日本橋社会教育会館で収録、41 才
古今亭志ん朝「柳田格之進」55 分
1993(H. 5). 10. 14 国立演芸場で収録、55 才
3. 参加費 100 円 (会場費の補填)

※打ち上げ 「はなの舞 蕨西口店」 駅歩 1 分 フレスポワラビ 2 階
恐れ入りますが、6 月 6 日までに①出席・欠席、②打ち上げの参加・不参加のご連絡を高橋までお願いいたします。

火 炎 太 鼓

江戸時代から伝わる小さな噺を、明治末期に初代三遊亭遊三が少し膨らませて演じた。この遊三の高座を修行時代に楽屋で聴き覚えた5代目古今亭志ん生が、昭和初期に多量のくすぐりを入れるなどして志ん生の新作といってもよい程に仕立て直し、現在の形とした。

古道具屋の甚兵衛は、相当な呑気者で、その上、店のタンスに惚れ込んで入ってきたお客に「6年も置きっぱなし」「引き出しが開かない」などと正直を言って、お客を呆れさせてしまうぐらいの商売下手だ。おまけに、お調子者で、近所の人から自宅の火鉢を褒められると気を良くして後先考えず売ってしまい、寒くて困っている。抜け目のない妻がいるから、何とか商売を続けていられるようなものだった。

この日、甚兵衛が仕入れてきたのは、古く汚い太鼓であった。あまりにも汚いので、丁稚の定吉に店先でハタキをかけさせていると、定吉は遊んで叩き音を鳴らしてしまう。



たちまち、一人の侍が店に飛び込んで来た。大名が駕籠で近くを通っていたようで、太鼓の音が大名の癪に障ったのかと、甚兵衛たちは戦々恐々である。

ところが、侍の話では「通りかかった主君の赤井御門守様が、太鼓の音をえらく気に入り、ぜひ実物を見てみたいから屋敷まで太鼓を持って来て欲しい」という。

甚兵衛は喜ぶが、妻は「こんな汚い太鼓が売れるのか」と不審を抱く。「どうせそんな太鼓はほかに売れっこないんだから、元値の一分で売り払ってしまえ」とまで言い放つ。

甚兵衛が屋敷に太鼓を持参し、殿様に見せると…

木乃伊取り

大店の一人息子で道楽者の若旦那が吉原へ遊びに行ったきり帰らない。あちこちと探して見ると角海老に居続けしているという。

大旦那は連れ戻すために番頭の佐兵衛を吉原へやるが「木乃伊取りが木乃伊になって」、一緒に遊んで5日も帰って来ない。



今度は鳶の頭(かしら)に頼む。「腕の一本くらい叩き折っても連れて帰る」と威勢よく店を出る。途中の日本堤で幫間の一八につかまり、吉原へ遊びに行くのかと勘違いされ、しつこく取り巻くのを振り切って角海老へ乗り込む。若旦那に「どうかあっしの顔を立てて」と掛け合っているところへ一八が「よっ、頭、どうも先ほどは」と入って来た。あとはドガチャガで、番頭も角海老の虜(とりこ)になってこれも7日経っても未だ帰還せず「木乃伊2号」の誕生だ。

大旦那夫婦はあんな道楽者になったのはお前のせいだとなすりつけ夫婦喧嘩を始める始末だ。そこに現れたのが飯炊きの清蔵。「おらが迎えに行ってみるべえ」と言い出す。「お前は飯が焦げないようにしてりゃいいんだ」と叱っても、「もしも、泥棒が入って旦那がおっ殺されるちゅうとき、台所で這いつくばってる分けには行かなかんべえ」となるほど正論だ。清蔵は「首に縄をつけても連れ帰る」と、なり振り構わず吉原へ突進だ…

柳田格之進

元彦根藩士の柳田格之進は、文武両道に優れ、清廉潔白だが正直過ぎて人に疎まれ、讒言(ざんげん)にて今は浪々の身となり、浅草阿倍川町の裏長屋に17才になる娘のお絹と二人暮らし。今日の米にも困る暮しぶりだが、そんな中にあっても武士の矜持を忘れず実直な人柄は少しも変わることはない。彼を慕う浅草馬道の両替商、万屋源兵衛と共に碁を打ち酒を酌み交わすのが、唯一つの楽しみであった。



八月の十五夜の月見の夜、格之進は万屋宅での月見の宴に招かれ、いつものように離れ座敷で碁を打つ。格之進の帰宅後、番頭の徳兵衛が主人の源兵衛に碁の最中に渡した50両の始末を尋ね、金が無くなっていることに気付いた。徳兵衛は格之進を疑うが源兵衛は「あのお方に限ってそれはない」と、番頭を諭す。



しかし、徳兵衛は主人に内緒で格之進宅に赴き50両の行方を問いただす。「いやしくも身共は武士、何ゆえあつてかような疑いをかけるか。」と激する格之進に対し、徳兵衛はいずれにしても大金が消えたのは事実だから奉行所へ金の紛失を届けるといふ。たとえ身に覚えはなくとも、奉行所の取り調べを受けることは不名誉とし、格之進は明日までに金の支度をする約束する。

格之進は自害するつもりでいたが、お絹は自ら吉原へ行き金を工面するという。そして盗んでない以上、いずれ50両は見つかるでしょうから、源兵衛と徳兵衛を斬って武士の体面を守ってくださいと言う。格之進は徳兵衛に50両を渡し、徳兵衛は二つ返事でもし金が見つかったら自分と主人の首を差し出すことを約束する…